



## 新型インフルエンザについて

鳥インフルエンザウイルスが流行する中で、鳥から人に感染する事例が数多く報告されている。今後、ヒトからヒトへ感染する新型インフルエンザに変異して、世界的な大流行(パンデミック)が引き起こされることが危惧されている。この新型インフルエンザには、人類のほとんどが免疫を持っていないために、感染の拡大を抑えて、被害をできる限り小さくするために、国や自治体における対策はもちろんの事、一人一人が必要な準備を進め、実際に発生した際は適切に対応していくことが大切である。

新型インフルエンザの侵入を水際で対策するには、国際空港からの流入を阻止することも有効な手段であるが、その現場における問題や課題を抱えているようである。愛知県の中部国際空港では、隣接する地域にある



ウイルス感染を防ぐための陰圧病床は、知多厚生病院(愛知県美浜町)に六病床だけである。愛知県内では、十病院に計44病床となっている。感染者の入国をとにかく水際で防ぐことが有効な手段となるのかもしれない。感染者がその症状を自覚するまでには、ウイルスの潜伏期間の10日間が経過する。いったんヒト型に変異した新型インフルエンザは感染力が強く、一人の感染者から2日後には、そのほかの地域でも感染者が見つかり、数日後には数十万人が感染することになる。初発の感染者を隔離する迅速な対応が感染拡大を防止するポイントとなる。

### 第24回 日本ペストロギー学会 2008年10月16日(木)~17日(金)大阪メルパルクホール

本社技術部に所属する若手の2名(熊崎隆宏・荒川正樹)がポスターセッションの発表をするために、参加をしました。

#### ・ポスターセッションの発表演題

「2007年~2008年に渡る愛知県の住宅地と岐阜県の水田地帯での  
モスキートマグネットにおける蚊成虫発生調査について」 演者：本社技術部 熊崎 隆宏

「2008年度蚊類発生調査：第2報 雨水拮調査」 演者：本社技術部 荒川 正樹

#### ・一般口演よりのレポート

「クォンタムランプと従来型 UV ランプのイエバエ誘虫力比較：足立雅也氏(鷹図商事株)」 熊崎 隆宏  
昆虫類が好む近紫外線(360~370nm)を集中的に放射する最新型UVランプ(クォンタムランプ)と従来のライトトラップで使用される(300~400nmの近紫外線を出す)UVランプでイエバエの捕獲個体数を比較し、クォンタムランプでのイエバエ捕獲率が非常に高く従来のものの約2倍も捕獲されたという結果報告でした。

イエバエ以外の昆虫類でも同様の試験を行えば、さらに信憑性が増すのではないかと考えられます。昆虫類のモニタリングは、クォンタムランプの商品化により精度の高いデータが得られると考え、現場管理担当者にとって期待される研究ではないかと感じました。【クォンタムランプ使用した商品 <http://www.teisokasei.com/products/hochu/index.htm#max30>】

「東京都大田区におけるカ類調査 -第3報 2007年の成績-：伊藤弘文(東京都害虫防除協同組合)」 荒川 正樹

東京都大田区におけるカ類調査を行った発表では、以前から弊社技術部で使用している同等のCDCトラップを使用して蚊の捕獲調査を行っていました。国立公園内の3箇所採取した結果は、ヒトスジシマカ 873個体、アカイエカ群 270個体、コガタアカイエカ 13個体と多くの蚊が捕獲されていました。 ウェストナイル熱などを媒介するカ類が、日本に上陸して感染症を発症する起因となると深刻な問題となりますので、カ類の生態調査を行うことはいかに大切な事だと、あらためて実感することができました。